

総合科学技術・イノベーション会議 評価専門調査会
大綱的指針ワーキンググループ (第2回)

資料 7

話題提供

研究評価改革の国際動向

2026年9月7日

科学技術振興機構 (JST)
研究開発戦略センター (CRDS)



1. 研究評価改革の背景と動向

- ・はじめに
- ・ 研究評価に関するサンフランシスコ宣言（DORA）
- ・ 研究評価改革のための連合体（CoARA）
- ・ GRC 責任ある研究評価ワーキンググループ
- ・ OECD GSF 『よりよい科学のための研究評価改革』

2. 研究評価改革の動向からみた注目すべき論点

- ・ 研究の質や研究活動の多様な側面の評価
- ・ 新たな評価手法の開発と効果検証
- ・ 研究評価にかかる負担への対応
- ・ AIによる研究環境の変化と研究評価

はじめに：研究評価の対象と評価時期の概観

国の評価制度は、評価の目的や対象に応じて各種法令・制度が整備されている。研究評価の対象と時期は下表のように概観できる。なお、プログラム評価は政策評価と研究評価の両面を持つ。研究評価改革の議論は、機関等の評価、課題の評価、研究者等の業績評価、が中心。

評価時期 評価対象		事前評価	中間評価、モニタリング	事後評価、追跡評価
研究開発 プログラムの 評価	プログラム 横断型	府省横断的目標の設定	モニタリング・ダッシュ ボードの構築 など	次期戦略への反映、 評価システムの見直し
	個別 事業型	事業の事前評価、 予算査定 など	事業の中間評価、 年度報告 など	事後評価、フォローアップ評価、 社会的インパクト評価 など
研究開発機関等 の評価		研究機関等の法人の 計画策定	研究機関等の年次評価、 中間評価	機関活動の事後評価、 社会的インパクト評価 など
研究開発課題 の評価		研究プロジェクト の採択	プロジェクトの中間評価、 ステージゲート評価 など	プロジェクトの事後評価、 フォローアップ評価 など
研究者等の業績 の評価		研究者の採用、昇進	人事業績評価 など	賞や称号の授与

JST-CRDS『調査報告書 研究評価の国際動向』（2026年2月）<https://www.jst.go.jp/crds/report/CRDS-FY2025-RR-04.html> より一部改変

研究評価改革の背景にある問題意識と提言

研究評価改革の議論は、評価への論文数・引用数といった定量的指標の誤った利用に対する、研究者コミュニティや国際機関からの問題提起が源流となっている。

〈主要な問題群〉

- 研究活動が持つ多様性や創造性を十分に評価できていない
- 研究者の自由な発想や挑戦意欲を削ぎ、研究活動を萎縮させている
- 研究不正や過度な論文投稿戦略を招いている
- 研究者同士の過度な競争を煽り、職業としての不安定性を招いている

紹介

〈主要な提言や合意文書の論点〉

紹介

紹介

紹介

主体・提言	DORA (2013年~)	ライデン宣言 (2015年)	香港原則 (2019年)	ラテンアメリカ 研究評価 フォーラム (2019年~)	CoARA (2022年~)	GRC RRA-WG "Dimensions of Responsible Research Assessment" (2024年)	OECD GSF "Reforming research assessment for better science" (2026年)
主な問題意識・論点	• 評価における定量的指標の過度な利用 • 個々の研究ではなく発表された雑誌に基づいた研究評価が行われている	• 計量が評価の代替として用いられている • 英語以外の言語での研究の軽視 • データ収集、分析のブラックボックス化	• 疑わしい研究慣行の横行 • 幅広い研究活動が評価されていない • 不当なインセンティブの最小化	• 定量的指標の過度な利用 • ジェンダーの不均衡 • 文化、民族、研究テーマといった面での多様性の考慮	• 評価における定量的指標の過度な利用 • 大学ランキングの評価への利用 • 新たな研究評価ツールやプロセスの開発	• 責任ある研究活動の評価と報奨 • 研究から社会的インパクトに至る経路の多様性 • 評価者へのトレーニング	• 新たな評価手法の実験と効果検証 • オープンデータ推進、商用データからの脱却 • ランキング等の使用抑制

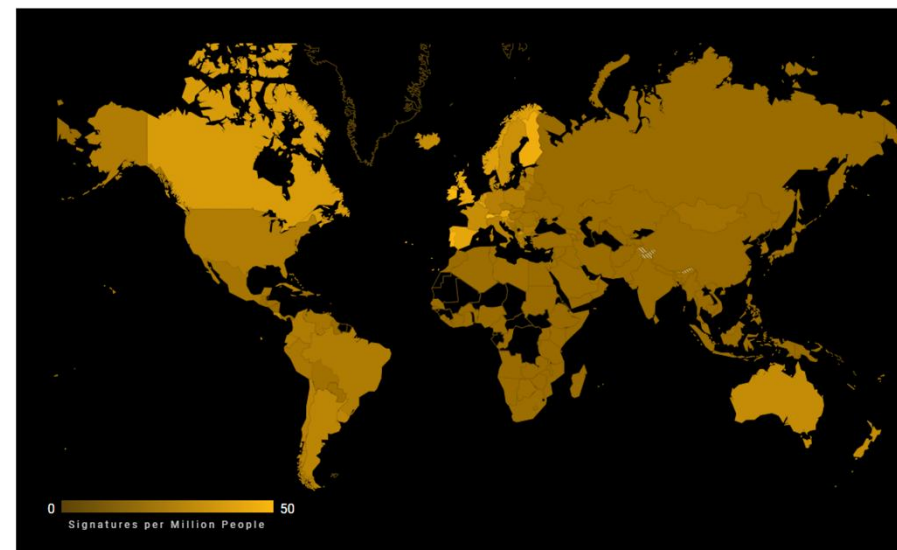
UK Research and Innovation (UKRI). 2015. *Review of Metrics in Research Assessment and Management*. <https://www.ukri.org/publications/review-of-metrics-in-research-assessment-and-management/> などからCRDS作成

DORA : 研究評価に関するサンフランシスコ宣言

The Declaration on Research Assessment

2013年、米国細胞生物学会の関係者を母体とした「研究評価への定量的な指標の利用を避けるべきである」との宣言。その後、資金を得て組織的な活動へと展開している。

- 主な署名機関：大学等研究機関、学協会、ファンディング機関、出版社、研究者個人 など
- 2026年9月1日現在、27,333人、3,683機関が署名。日本からは189人、19機関が署名。
- 2018年、米国細胞生物学会の他、PLOSなどの出版社やUKRI、ウェルカム財団などの出資を受け、専任スタッフを抱えた積極的なキャンペーン活動へと役割を大きく進化。



署名機関・個人の地理的分布

宣言の主なポイント

- 研究助成、採用や昇進の検討の際、すなわち個々の科学者の貢献を査定する際に、ジャーナルインパクトファクターのような雑誌ベースの定量的指標の使用を排除すること。
- 研究が発表される雑誌をベースにするのではなく、研究自体の価値に基づく評価をすること。
- 論文以外の研究成果も評価対象とすること。

DORA：研究評価改革へ向けた具体的行動

The Declaration on Research Assessment

研究評価改革の理念への同意（署名）から、具体的行動に向けた活動へと展開。
理念と評価実践の場との溝を埋めるガイドラインやチェックリストなどを作成。

■指標の責任ある利用に関するガイドライン（2024）

- 定量的な指標を評価に用いる場合の注意点を整理。

指標	ジャーナル・インパクト・ファクター（JIF）	被引用数	h-指標	分野加重被引用指数	オルトメトリクス
注意点の例	個々の論文の被引用数予測指標としては性能が悪い。	分野で傾向が異なる。研究の質の指標としては使えない。	キャリアの中断を考慮できない。DBにより大きく左右。	分野の定義が困難。経年的なブレ幅が大きい。	数値の算定や重み付けが不透明。

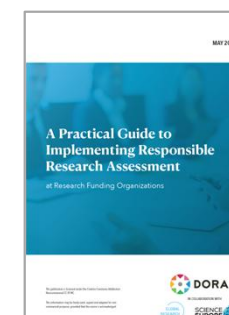
■研究機関向け実践ガイド（2025）

- 研究機関での評価実務へ反映するためのガイド。機関内のコミュニティの構築、マネジメント層の賛同とサポート、既存の評価システムを漸進的に変化させていく継続性などの重要性を指摘。

（事例の掲載例）東京大学でのコミュニティ構築、丁 オールボー大学や中国科学院での評価システム変更、など

■ファンディング機関向け実践ガイド（2026）

- ファンディング機関での評価実務へ反映するためのガイド。ファンディングプログラムの立ち上げ、具体的な設計、採択プロジェクトの決定、プログラムのモニタリング、コミュニティへの関与の各段階で研究評価改革を実践する際のチェックリストを提供。



DORA. (2024). Guidance on the Responsible Use of Quantitative Indicators in Research Assessment. <https://doi.org/10.5281/zenodo.10979644>

Allen, L. et al. (2025). A Practical Guide to Implementing Responsible Research Assessment at Research Performing Organizations. DORA. <https://doi.org/10.5281/zenodo.15000683>

Allen, L. et al. (2026). A Practical Guide to Implementing Responsible Research Assessment at Research Funding Organizations. DORA. <https://doi.org/10.5281/zenodo.18402272>

CoARA : 研究評価改革のための連合体

The Coalition for Advancing Research Assessment

欧州を中心に研究評価改革を目的とした学術関連機関の連合体。
DORAに比べ、署名機関に対して研究評価改革へ向けた積極的なコミットメントを求める。

活動の変遷、経緯

- 2022年7月、サイエンスヨーロッパ（研究助成・実施機関の連合）、欧州大学協会、欧州委員会で検討されていた**研究評価改革の合意文書の最終版**が公開。
 - ▶ **研究の質とインパクトの最大化を目標**とし、ピアレビューを中心とした定性的評価を重視
- 2022年9月、**研究評価改革のための連合体 (CoARA)** が発足。
 - ▶ 2026年8月末時点、欧州を中心に、ファンディング機関や大学など977機関が署名。
(日本からの署名機関は無し)
 - ▶ 署名機関は、**CoARAの全体原則への合意と、研究評価改革へ向けた10項目のコミットメント**が求められる。(⇒スライド8に詳細)
- 2023年から、組織機能の強化と研究評価改革へ向けた取り組みを支援するため、EU Horizon Europe から約8億8000万円（500万€）を獲得。新たな評価アプローチの試行プロジェクトなどを推進。
(⇒スライド9に詳細)

Arentoft, Michael, Stephane Berghmans, Lidia Borrell-Damian, Silvia Bottaro, Jean-Emmanuel Faure, Vinciane Gaillard, Kostas Glinos, et al. 2022. *Agreement on Reforming Research Assessment*. Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.13480728>. などよりCRDS作成



CoARA : 全体原則と10のコミットメント

The Coalition for Advancing Research Assessment

署名機関は、CoARAの全体原則への合意と、10項目のコミットメントが求められる。
各機関からCoARAへ、研究評価改革に向けた具体的な進捗状況の報告が必要。

全体原則

包括的な条件のための原則

倫理・インテグリティに関する
規則と慣行の遵守

科学的研究の自由の保護

研究機関の自律性の尊重

研究評価と研究のインパクト
決定に必要なデータ・インフラ・
基準の独立性と透明性を確保

評価基準・プロセスに関する原則

質・インパクト

多様性・包摂性・協働

10のコミットメント

1. 研究の必要性や特性に応じて、研究への貢献やキャリアに多様性があることを認識する
2. 研究評価はピアレビューを中心とした定性的評価に基づき、定量的指標の責任ある利用によりサポートされる
3. 研究評価において、ジャーナルや出版物に基づく評価基準の不適切な使用を放棄する
4. 研究評価における研究機関ランキングの利用を避ける
5. コミットされた組織的な変化を達成するために、必要な研究評価の改革に資源投入する
6. 研究評価基準、ツール、プロセスを見直し開発する
7. 研究評価改革に対する認識を高め、評価基準や評価プロセス、その使用方法について、透明性のあるコミュニケーション、ガイダンス、トレーニングを提供する
8. 実践と経験を交換し、CoARA内外の相互学習を可能にする
9. 原則の遵守とコミットメントの実施に関する進捗状況を報告する
10. 確固たるエビデンスと最先端の研究の研究 (Research on research) に基づき、実践・基準・ツールを評価し、エビデンス収集と調査のためにデータをオープンにする

CoARA署名機関ネットワークを通じた、活動を積極的に展開。各国それぞれ評価システムが異なるため、国内での関係機関間の対話や相互学習も促進している。

① 個別課題に対応したワーキンググループ活動の展開

- さまざまなバイアスへの対応や、新たな評価手法の実験などを目的とした、13のワーキンググループを設置し、ツールの開発などを実施。

個別課題例) 人文学・社会科学の評価枠組み策定、初期・ミッドキャリアの研究者評価 など

② 各国の実情に合わせた署名機関ネットワークの構築（ナショナル・チャプター）

- 各国内で、ファンディング機関と大学など立場の違うステークホルダー間での調整を行う枠組み（＝ナショナル・チャプター）を立ち上げ。
- 英国、ドイツ、スイス、スウェーデン、スペインなど20カ国で実施。機関間の対話や相互学習、評価システムへの反映活動を展開。各国の取り組みはCoARAネットワークでも共有される。

③ ツールの実装や試行などを行うBoostプロジェクトの推進

- Horizon Europeから2023年10月～2026年9月まで3年間、計約8億8000万円（500万€）を獲得。
 - ワーキンググループ等で開発されたツールの実装や新たな評価アプローチの試行プロジェクトの実施
 - CoARAのネットワークやアウトリーチ機能の強化

④ 署名機関のアクションプラン、タイムフレームの公開・共有

Coalition for Advancing Research Assessment (CoARA). 2023. *CoARA Boost Project*. <https://www.coara.org/coara-boost-cascade-funding/coara-boost-project/>
Coalition for Advancing Research Assessment (CoARA). 2024. *Working Groups*. <https://www.coara.org/wg-nc/working-groups/>

“Dimensions of Responsible Research Assessment”

GRCは世界50カ国以上のファンディング機関の長で構成される国際ネットワーク。
より健全で質の高い研究文化を支援する、「責任ある研究評価（RRA）」WGを立ち上げ
（2021年発足、英・独・ブラジルなど16カ国参画）。2026年には実践ガイドの整備へと進展。

活動の5本柱

1. RRAの検討枠組みやビジョンの提示（2024）

『責任ある研究評価の11の側面』を公表。評価ポリシーが大学や研究文化に与える影響、レビュアー選定の視点など、ファンディング機関において責任ある研究評価と評価改革の原則を組み込むための指標を提示。

2. RRAの実践状況に関する調査（2020, 2024）

Research on Research Instituteと共同で、GRC加盟機関に対する質問紙調査を実施。

3. RRAの事例集、デジタルライブラリ公開（2025）

4. ファンディング機関向け自己評価ツールの開発（2026）

5. ファンディング機関向け実践ガイドの作成（2026） DORA、Science Europeと共同作成

〈責任ある研究評価の11の側面〉

基本原則	1. 研究公正の遵守、推進への関与
	2. オープンな研究の奨励
	3. 研究におけるEDIへの関与
	4. 国際課題や緊急事態への対応
ガバナンスと戦略	5. 評価プロセスの責任ある運営、モニタリング
	6. 研究評価改革への責任あるアプローチ
	7. 研究機関の評価方針、慣行への影響力の行使
プロセスと方法論	8. 評価基準の透明性と発信
	9. 研究活動への多様な貢献や幅広い成果への評価
	10. 社会的インパクトへの責任あるアプローチ
	11. レビュアーやパネル選定への責任あるアプローチ

OECD GSF『よりよい科学に向けた研究評価改革』

“Reforming research assessment for better science” (2026年3月)

OECD グローバル・サイエンス・フォーラムによる、各国政府および政策担当者への提言（14カ国・6組織が参画、2026年3月発行）。研究者コミュニティの議論から、科学技術・イノベーション政策としての国際議論へと発展している。

■ 問題意識

- 研究評価は研究者の行動に強いインセンティブを与える一方で、現状の評価慣行は出版物に基づいた指標に偏重。
- 研究・教育に加え社会課題への貢献の期待など、研究活動や研究者に対する社会や政策からの要請や研究プロセスの変容が大きい中、研究評価システムがその変化に整合していない。
- 政策として、新たな研究評価の仕組みへの転換をどう支援できるのか？

■ 政策としての優先事項

- ① 国際的なイニシアティブ（DORA、CoARAなど）推進の取り組み支援
- ② 多様なステークホルダーの関与、柔軟性をもった改革の実施、研究システムの変化に適応する評価システムの継続的な見直し
- ③ 新たな研究評価手法の実験と効果検証の促進（実験的ファンディング）
- ④ オープンデータの推進と商用データ依存からの脱却
- ⑤ 商業的なランキング・順位表の使用抑制（可視化には有用だが、評価や資金配分の根拠とすることは不適切）
- ⑥ 必要な時、必要なことだけを評価する（目的に応じた最小限の規模と適切な方法で、評価負担を軽減）
- ⑦ AIの慎重かつ責任ある活用
- ⑧ 評価に関わる人材（政策決定者・管理者・研究者・評価者・事務方）のキャパシティビルディング支援



OECD (2026), “Reforming research assessment for better science”, OECD Policy Briefs, No. 56, <https://doi.org/10.1787/f6202159-en>.

OECD (2026), “New expectations and demands from science: Rethinking research assessment frameworks”, OECD Science, Technology and Industry Working Papers, No. 2026/07, <https://doi.org/10.1787/0c685800-en>.

1. 研究評価改革の背景と動向

- ・はじめに
- ・ 研究評価に関するサンフランシスコ宣言（DORA）
- ・ 研究評価改革のための連合体（CoARA）
- ・ GRC 責任ある研究評価ワーキンググループ
- ・ OECD GSF 『よりよい科学のための研究評価改革』

2. 研究評価改革の動向からみた注目すべき論点

- ・ 研究の質や研究活動の多様な側面の評価
- ・ 新たな評価手法の開発と効果検証
- ・ 研究評価にかかる負担への対応
- ・ AIによる研究環境の変化と研究評価

研究の質や研究活動の多様な側面の評価

国際的な研究評価改革の議論で「研究の質」や「研究活動の多様な側面」への言及は必出。「研究の質」の基準は分野やテーマなどによって異なるため、研究コミュニティでの議論も踏まえた研究評価システムの継続的な見直しが求められる。

■ 「研究の質」の評価への示唆

- 研究の「質」や「卓越性」の基準は分野ごとに異なり、研究者間の合意によって形成される。
⇒ 学術界によるボトムアップの議論を反映した評価システムの構築が必要
- 英国のUKRIやNIHRなどでは、研究の質は定量的指標だけでは測れない、とのポリシーに基づき、評価ガイドラインで「指標を用いる場合、常に他のエビデンスと組み合わせること」と明示。
- DORAは、評価者の能力向上の必要性を提言。評価者向けのガイダンスなども提示：
 - 評価基準に一貫性を持たせる方法、CV・申請書の記載内容の解釈について
 - 評価者が使用してはいけないツール・指標
 - 審査過程で陥りやすいバイアス及びその軽減策

■ 社会課題解決など「研究・教育以外への貢献」の評価への示唆

- 英国、豪州、オランダなどでは、大学評価の一部に社会的インパクト評価を導入。インパクトを生む活動（エンゲージメント）も含めた評価へと拡大する事例も。

■ 「研究への多様な貢献」の評価への示唆

- 論文業績以外の研究活動への貢献（例：データのキュレーション、学会活動への貢献など）を評価対象に含むとともに、従来の評価指標依存を減らす試みとして、欧州などでナラティブCVの導入が進展。

Allen, L. et al.(2026). A Practical Guide to Implementing Responsible Research Assessment at Research Funding Organizations. Declaration on Research Assessment (DORA).
<https://doi.org/10.5281/zenodo.18402272>

Kearnes, M., Wienroth, M. Tools of the Trade: UK Research Intermediaries and the Politics of Impacts. Minerva 49, 153–174 (2011). <https://doi.org/10.1007/s11024-011-9172-4>

新たな評価手法の開発と効果検証

研究評価改革の議論を受けて、現在の評価システムが直面している課題を解決するため、新たな手法の開発や効果検証が一部で試行的に始まっている。

実験的ファンディングとは（参考：英国 Research on Research Instituteによる定義）
研究申請のレビュープロセスに新規の手法で介入し、効果を検証することでファンディングシステムの効率化や効果の最大化を狙う取り組み

研究課題の評価プロセスで指摘される主な課題

- **評価負担の軽減と、質の高い課題採択との両立が必要**
研究者、評価者、ファンディング機関の評価にかかる負担は増大。
より効率の良い資金配分や評価方法の模索として、実験的手法などを応用し、新たな評価手法の開発や評価システム自体の改善へつなげる。
- **採否のボーダーラインにある申請書の評価の困難さ**
部分的ランダム化ファンディングやゴールデンチケット方式などの試行
- **ピアレビュー・システムの限界**
ピアレビューの品質やレビュアーの確保の解決案を模索
- **バイアス（応募者の所属機関、研究分野、過去の資金獲得実績、年齢・性別など）の影響**
- **多様な研究者からの研究申請の促進**



Bendiscioli, Sandra; Firpo, Teo; Bravo-Biosca, Albert; Czibor, Eszter; Garfinkel, Michele; Stafford, Tom; et al. (2022). The experimental research funder's handbook (2nd edition, ISBN 978-1-7397102-0-0). Research on Research Institute. Report.
<https://doi.org/10.6084/m9.figshare.19459328.v5>

研究評価にかかる負担への対応

評価にかかる負担は従来からの課題。定性的評価への転換、形成的評価の促進などを掲げる研究評価改革は、負担軽減と一部相反する可能性。ファンディング機関などを中心に、評価を実施する現場では、課題評価やプログラム評価における負担軽減の模索が行われている。

■ 課題評価

〈負担軽減のための評価介入手法の事例〉

区分	手法	概要	期待される効果	問題点等	導入事例
申請前	研究機関向け 需要管理	各研究機関が提出できる 申請件数を制限	FAでの審査負担の軽減	研究機関間の格差を 拡大させる可能性	英国UKRI・リサーチカウン シルの一部プログラムで導入
申請時	申請書類の 簡素化	申請書の記載項目、 記載分量の削減	申請書作成負担の軽減、 機関・FAの事務負担軽減	ピアレビューでの 参照情報が限られる	申請書記載内容は各FAの 評価ポリシー等に基づき決定
	共通CVの利用	申請書類の代替として 政府等システム上の 共用CVを活用	申請者による CV作成の負担軽減	定量的業績が多く参照 される可能性（ナラティ ブCV導入との相反）	米国NSF・NIHの共通CV、 独DFG「elan」など
審査 プロセス	AIによる レビュアーの マッチング	レビュアー選定における AI活用	FAプログラムオフィサー 等の事務負担の軽減	バイアス等、AIの問題点 への対応の必要性	スイスSNSF、蘭NWO、 西ラ・カイシャ財団で導入
	申請者による レビュアー提案	申請者自身が審査のため のレビュアーを提案	FAプログラムオフィサー 等の事務負担の軽減	レビュアー選任における 利益相反等の妥当性	米国NSF等で導入（プログラ ムオフィサーの判断による）

■ プログラム評価

英国UKRIの評価戦略では、プログラムの「規模」や「仕組みの新規性」に応じて、

①自己評価 < ②外部専門家による委員会での評価 < ③外部委託評価 など、評価の規模を決定。

AIによる研究環境の変化と研究評価

AIの活用により研究を取り巻く環境が大きく変化。研究評価においては、研究におけるAI利用への対応と、評価プロセスへのAI導入という二つの側面が論点として挙げられている。

■ AIによる研究システムの変化

AIの活用や研究活動のデジタル化、学際化、社会的期待の変化などを背景に、研究システムが急速に変化。研究のあり方にも変化をもたらし、新たな可能性が拓くとともに予測困難な課題も生じている。
→ 研究システムの変化に応じた評価システムの適応が求められる。

■ 研究評価改革の議論における「AI」を巡る論点

✓ 研究におけるAI利用への対応

- ・ 研究者によるAI利用に関する方針等の明確化
- ・ 「AIが書き、AIが評価する」状況での、既存バイアスの強化や新規性低下への懸念

✓ 研究評価へのAI導入

- ・ 活用の可能性（申請スクリーニング、審査者マッチング、審査コメント要約、進捗評価など）
- ・ 一方で、懸念も（誤り、バイアス、透明性・説明可能性など）

（参考）RoRI プロジェクト「研究資金配分および評価におけるAI・機械学習の責任ある活用」からの示唆*

- ・ 研究資金配分・評価へのAI導入は、実験・検証を重ねながら段階的に進めることが求められる。
- ・ 各段階での検討（モデル等の選択、データの選択、影響・リスクの評価、ツールの使いやすさ）
- ・ 実験にあたっての明確化（なぜ実験を行うのか、何を実験するのか）
- ・ 導入後も、モニタリングを通じた効果測定・改善・フィードバックを実施。

* Newman-Griffis, D., Woods, H.B., Wu, Y., Thelwall, M., & Holm, J. (2025). Funding by Algorithm - A handbook for responsible uses of AI and machine learning by research funders (ISBN 978-1-7397102-2-4). June 2025. DOI 10.6084/m9.figshare.29041715

ご清聴ありがとうございました

JST 研究開発戦略センター (CRDS)

各種報告書をWebサイトで公開しています。

<https://www.jst.go.jp/crds/>

お問い合わせ先

E-mail : crds@jst.go.jp

TEL (代) : 03-5214-7481

調査報告書 [CRDS-FY2025-RR-04](#)

研究評価の国際動向

<https://www.jst.go.jp/crds/report/CRDS-FY2025-RR-04.html>

「研究評価改革」に関する国際的な議論内容を取りまとめ。それを基に、研究機関と研究課題を対象とする評価に着目し、各国での導入状況を調査した。また、「実験的ファンディング」や研究課題評価への「AIの活用」といった、新しい手法の開発・試行事例についても紹介。

